明治三一・七・二 内交 圖
東京圖書館藏
W2 4356

はふりのりしもつまき（葬儀式下巻）

かみゝちのをさ（神道管長）
ひろきよつのくらゐいなばのまさくにあらはす（従四位稲葉正邦著）
おほきをしへのかみ（大教正）
おほきなゝつのくらゐごんだのなほすけしるす（正七位権田直助識）

およそことをなさむおもひ、それことあきらかならされバ、こころふうたがひおこるべし。こゝろふうたがひおこりたらむおもひ、おしはりて、そのことをなすこと得えざるべし。かみ

のくだりのごとく、はふりわざ、まつりのりをさだめてハ
あまたたびも、このみち、ひさしくよにすたれたりしかバ、そのつ
たへごとも、いとすくなく、そのことも、くはしくしらえでぞ
ありける。されバ、いにしへのことはあとゝ、いまのよに、みき
くところを、かむがへあハせて、かならずしも、かくあるべ
きことわりなるべく、おもほゆるかぎりをとりつめて、さだめ
つるうらに、ひとわたりにみあらむには、こゝろえがたくうた
がはしきふしも、おほかるべし。かれいまそれうたがはし

からむと、おもほゆることどもをとりいでゝ、あかしをたてゝ、
わきまふべし

まつりわざとはふりわざとそのもと
ことならざるをいふあげつらひ

はふりわざは、もはら、まつりわざにことならず。すべ
べて、いはやどのかむわざを、うつしゝものなることいふも
さらなるを、かのかむわざは、おほかみのみこゝろをなごめ
まつりて、いはやより、いでまさしめむとするみわざ、このは

ふりわざハ、なきたまをなぐさめて、かくりよへおくるなれ
まて、そのこゝろうらうへなれども、なぐさむるこそ、なごめま
つるこそハ、またそのおもぶきことなるところなし。されバ、はふ
りわざこそまつりわざなれ、そのもとこそハ、ひとつなりとこゝろう
べし。そがなかに、いまもをりをりおこなふなる、みやうつし
のみまつりなれども、もとものにたりといふべし。そハ、いとかしこ
あきびとも、はふりわざに、あらきにいりて、つかふるわざあれ
バ、みやうつしのまへに、かりみやにませまつりて、つかへま
つるのりなり。またみたまうつしのわざあれバ、かむざねを
うつしまつるのりあり。はふりたちのわざあれバ、かりみや
たちののりあり。はふりゆきのよそほひ、はふりゆきのつら
あれバ、うつりましのよそほひ、うつりましのつらあり。その
ほかのわざ、おほよそおなじ。ことごとくにあげむにハ、かしこ
けれバやむ。このもろもろまつりわざを、くはしくせざらむかぎ
りハ、このわざをたゞしくおこなふことをえざるなり。なほ
いはゞ、みやうつしのまつりハ、もとやしろ、そのやしろのかむ

づかさの、つかへまつるなれバ、かたきなかにもやすきところあるを、はふりわざハしも、たとへバ、そのやしろのかむづかさのさまたげありて、つかへまつることをえざるからに、ほかのやしろの、かむづかさのいりたちて、そのまつりつかへまつるがごとく、いとも〳〵かたきわざなりしか、かたきわざなるを、かたしともおもひたらんには、やすくいりたちて、ことをとるものなかのおほかるは、いまはこのみちのひらけざるゆゑなれバ、いひつるも、こゝろすべきことになむ

かくりよのこのよにすぐれたることのあかし

かくりよは、ことの、ふみにみえたるさまをかむがふるに、あらはよりは、いたくすぐれて、きよらくうるはしかるべくぞおぼゆる。そは、しやくにほんぎに、たんごふどきの、みづのえのうらしまのこが、とこよのしまにいたりしくだりをひきて、いへるところに、そのところ、たまをしきたるがごとく、たまのうてなてりかゞやき、たかどのはてりかゞやきて、めにみざるところ、みゝにきかざるところなりとみえ、また、ぞくにほん

ごき、しようわのなゝとせのしもつころに、いづのくに、かものこ
（後紀 承和 七年 下 伊豆 國 賀茂 郡）
ほりにます、あはのかみものいみなのみことは、しまつくり
（坐 阿波 神 物忌奈 命 島 造）
たまひしことをしるせるなかに、うるはしきはまあり。いろ
（記 美麗 濱 五）
いろのすなもてつくりなせり。ひとつのいそあり。そのいろ
（色 砂 成 修 一 磯 其 色）
みつのふたつは、ことごとくこがねいろして、てりかゞやく
（三分 二 悉 金 色 眩曜之）
さましるすべからずとみえ、また、さんだいじつろく、ぢやう
（状 不可記 見 三代實録 貞）
くわんのなゝとせのしもつころに、かひのくに、あさまかみの
（觀 七 年 下 甲斐 國 淺間 神）
かむわざとして、やしろをつくりたまへることをしるせる
（神 爲 社 造 記）

なかに、ひとつのたかどのあり。いしもてつくりなせり。いろ
（一重 高閣 以石 構營 彩）
どりうるはしきこと、あげていふべからずなどもみえたり。
（色 美麗 不可 勝言）
これらみな、かくりよのさまの、あらはよにあらはれたりし
（此等 皆 幽界 状態 顯界 現出）
ものなり。また、のちのちなどに、しんちよもんじふの、てん
（後 新著聞集 天）
ぐのひとよにほふとうじをつくりたまふ、じそうは、てら
（狗 一夜 法燈寺 造 寺僧 寺）
やけたるを、つくるてだてなくて、こゝろをくるしみをるに
（燒 造 築 術 心 苦）
きに、かみつけぬの、あかぎやまの、すぎのばうといふものき
（上州 赤城山 杉坊 來）
たりて、てらをつくりまゐらせむとちぎりけり。これによ
（寺 造 契約 因）

りて、ふたり(二人)のそう(僧)をつかひ(使)として、かみつけぬ(上州)の、あかぎ(赤城)は
やま(山)へつかはし(遣)けるに、そうども(僧等)、かのけはしきそば(嶮岨)やまを
よぢ(攀)、つたかづら(蘿葛)をつたひ(傳)て、からく(辛)して、みね(嶺)にのぼり(登)ける
に、やまぶし(山伏)ふたり(二人)いでき(出来)たりて、みちしるべ(導)せむといふに、あと(後)
にたち(立)ていたり(到)けるに、こがね(金)、しろかね(銀)、たま(玉)のうてなたかどの(宮殿楼閣)、かゞやきわたり、め(目)をおどろかし、きも(肝)をひやしぬ。また、たまはかけはし(珊瑚桟)をわたり、たまはきだはし(馬脳階)をのぼりて、すぎ(杉)の
ばう(坊)にもとにいりしことをしらせり。こゝらは、まがのかみ(邪神)
のすみか(界)なるも、いつしか、かくりよ(幽界)なれば、なかれうるはしき(仍)
なりけり。また、からぶみ(漢籍)にみえたる、げんてう(阮肇)が、いたり(到)しに、てんだいさん(天臺山)のふること(古事)なども、かくりよ(幽界)にいり(入)たるためしにて、その(其)やま(山)はうち(中)のうるはしき(美)こと、たま(玉)をかざれ(飾)るごとく、また、てんき(天氣)のけのどか(和適)にして、つね(常)に、きさらぎ(二月)やよひ(三月)のころほど(如)きよし(趣)なるをも、おもひあはす(思合)べし。また、ちかきころ(近頃)、かくりよ(幽界)へ、ゆきかひ(往来)せしもの、ものがたり(談話)をきゝ(聞)もてるもすくなから(少)ねば、かれこ(彼界)のさまは、てりわたりうる

○はふりこのこともつまき　　○六

はしきことをいくらもおなじ。これハ、こと(事)なのけれバ、さまで
にハやてやえつ。されバ、このよ(此界)にすぐれて、かのよ(彼界)のきよ(清)く
うるはしく(美)、こと(事)そなはり(備)、もの(物)たらへる(足)ことも、あきらかにしる(明察)
られあり。これら、やほよろづ(八百萬)、ちよろづ(千萬)のかみ(神)のすみませる(住坐)よ(界)
なれバ、さも(然)あるべきなり。ひと(人)もしにて(死)のち(後)ハ、たましひ(靈魂)
やがて(即)かみ(神)なれバ、かみ(神)のますかくりよ(坐幽界)にいるなり。されバ
そのよ(其界)ハ、いづく(何所)にある(有)ぞといふに、すなはち(即)、このよ(此界中)のな
かにいりまじりて(混交)あり、[illegible]して、め(眼)にみえ(見)ぬハ、ひと(人)の
よ(界)や、かみ(神)のよ(界)やれ、さかひ(境)きびしく(嚴)たて(立)れバなり。よくおも
ふべし

なき(亡)たま(靈)のかバね(尸)乃ちかき(近)にある(在)ことしれ
あかし(證)

なき(亡)たま(靈)の、かバね(尸)をしたひ(慕)て、とおく(遠)さら(去)ざることをしら
むにハ、まづ、はかどころ(墓所)に、まさしく(正)、わけみたま(分魂)とゞまる(留)
ことをしるぞさきなりける。そハ、おほさゞき(大鷦鷯)のすめらみこと(天皇)
のみふみ(紀)に、かみつけぬ(上毛野)のきみたみち(君田道)を、えみし(蝦夷)うち(撃)につ(遣)

かはしまひけるに、たみち、えみしのためにやぶられて、い
しのみなとにしにき。このゝち、えみしら、また、おそひきたり
て、おほみたからをかすめ、たみちはかのをほりしかば、おほ
きなるをろちありて、めをいからし、はかよりいでて、えみし
をくふ。えみしら、ことごとに、をろちのあしきけをうけて、お
ほくしにて、ただひとりふたりまぬかれき。かゝれば、ときのひと
のいはく。たみち、すでに、しにたれども、つひに、あたをむくひ
たりといひしよしみえたり。また、おほはつせのすめらみことの

みよに、いかづちをとりてたてまつりし、ちひさこべのすが
るは、はかに、いかづちなりおちて、いしぶみをふみさきける
ときに、そのさけまに、いかづちをはさみとりてけり。これに
よりて、いきてもしにても、いかづちをとらへすがるがはかと
しるして、いしぶみをあらためたてたまひしことは、にほんれいいき
にみえ、こじだんに、なかのゐんの、みぎのおほまうちぎみ
を、かりのひだりのうまのかみ、あきさだのあそみをば、つね
に、よりつどひて、へだてなくのりしつるが、あきさだ、みまかられ

しやきに、おほまへつぎみ(大臣)は、はか(墓)の、かたはら(傍)にうづむ(埋)。これ
にありて、あまよふけ(雨夜深更)などするに、ものがたり(談)して、わらは
ふこゑ(聲)なりしことみえたり。また、からぶみ(漢籍)に、りくうん(陸雲)が
いふもの、ともだち(故人)のいへ(家)にゆき(行)て、やどらむ(逗宿)として、いでたち
けるに、ひくれて(夜暗)みち(路)にまよひ(迷)、いづくともしらざりけり。た
ちまち(忽)、くさむら(草)のなか(中)に、ともしび(有火)のひかりみゆ。いたり(趣)て
みれば、ひとつのいへ(一家)ありて、うちに、ひとりの、かたちうる(美)
はしきわかもの(一年少)なり。よもすがら、らうし(老子)をかたらふ(談)。その(其)
ことば(辞)つね(致)ならず(深遠)。あかつき(暁)にいたりて(向)そこをさる(辞去)。みちの
ほとりに、とをさとばかり(十許里)ゆきて、ともだち(故人)のいへ(家)にいたり(至)、よべの
ことをかたるに、ともだち(故人)きゝて、これ(此)あたり、やをさとばかり(数十里)
のあひだ(中)には、さらに、ひと(人)のすまゐ(居)なし(無)といふ。りくうん(陸雲)は
じめて(始)さとり(悟)て、かへりて、よべ(昨)のやどり(宿処)をたづぬる(尋)に、すな(乃)
はち、わうひつ(王弼)がつか(塚)なりしとしりぬ。これも、わうひつ(王弼)がた
ま(霊)の、はか(墓)のほとりに、とゞまれりけるなり。かゝる(斯)あやしき(奇異)ことなり
しなり。なほ(猶)、ふたゝび(再)、このよ(此世)に、うまれいで(生出)たる、まへ(前)の、まへ

のよに、いのちしにしやきの、ことのさまをしりゐて、かたりしことなれど、しるせるものあれど、ことながければ、もらしつ。これら、かばねにつきて、はかどころに、わけみたまのとゞまれるものなり。すでに、はふりうづみしのちすら、なほ、かくのごとし。まして、いまだはふらずして、あらきのうちにあるところをや。かならず、さりがてに、そのかばねちかきにあるべきなり。このことは、はふりわざをおこなふこころえのもとにて、あらきわざより、うづみわざにいたるまで、ここによらざることなし。もし、ここにうたがひありて、このことをおこなひたらむには、もろもろのわざはさらなり。のりとも、しぬびごとも、すべて、いたづらごととなりぬべし。いはひびとゝして、このわざにあづかるべきかぎりのともがらは、ふかくこころをここにとゞむべきことになむ

はふりまつりつかさびとのわかち

かみのくだりにも、いへるごとく、はふりわざは、まつりわざにことなることなし。しかるに、そのまつりわざは、しも、かみ

よゝより（世）つたはれる（傳）のり（式）ありて、ひとびと（人世）ふるく（舊）おこな（行）
ひきたる（來）ものにハあれども、なかむかし（中古）より、よろづ（萬）、からぶ（漢風）
りになづめる（拘泥）ひとごゝろ（人心）にて、これわざ（祭儀）にあづかる（關）なども（名目）、
さいし（祭祀）、さいてん（祭典）、さいしゆ（齋主）、ふくさいしゆ（副齋主）、てんぎ（典儀）、さんしや（賛者）、さ（座）
いふ（揖）、たふいふ（沓揖）、さいはい（再拜）、はくしゆ（拍手）、ちやくざ（著座）、しつかう（膝行）などを
はじめ、みくに（皇國）ゝあらぬ、からごと（漢語）もてなづくる（稱）ことなり
もてきぬるを、いともこゝろうれたき（慷慨）ことなり。とつくに（外國）の
ひと（人）これをきかば（聽）、いかでかみくに（皇國）のてぶり（風儀）とはいはまし。

こたび（今回）、さだむるのり（定式）ハしも、いにしへ（上古）の、みけびと（御食人）、あそびと（遊人）、
わたつくり（綿造者）、また、はにし（土師）など いへる、はふりわざ（葬事）に、つかさび（職員）
との なに なずらへ（擬）て、その なを まけ（名設）、そのほか（其他）のもの（物）、ものごと（事）
も、すべて（總）、みくにぶりのことば（皇國風語）もて（以）、いひもてゆく（言稱）もすること
ば、かみつまき（上巻）のくだりくだり（條々）にいへる（言）がごとし（如）。そがなか（其中）の
に、かみまつり（神祭）のことに、たえてなき（絶無）つかさびと（職員）のな（名）も、あまた（多）かれ
ば、こゝに、ひとつゞゝゝ（一一條）にくばり（分）をわかちて、それあるやう（其掌）こ
ろをあげて（擧）わきまふ（辨）べし

いはひぬし（齋主）　はふりまつり（葬儀）もろもろ（諸般）をすべをさめ（總理）、いはひべ（齋部）をゐて（率）、まつりわざ（祭事）をおこなふ（修行）つかさ（職）なり

いはひのすけ（副祭主）　いはひぬし（齋主）をたすけて（輔）、こと（事）ををさめ（理）、はふりまつり（葬祭）もろもろのこと（諸事）をはかりさだめ（議定）、また、いはひぬし（齋主）につぎて（次）、まつりわざ（祭事）をつとむる（勤）つかさ（職）なり

いはひべ（齋部）　はらへぬし（祓主）、はらへし（祓師）、てながをさ（手長長）、てなが（手長）、しどり（後取）など（等）の、つかさごと（諸職）をもちわけて（分掌）、つかふる（仕）つかさ

なり

はらへぬし（祓主）　はらへわざ（祓事）をすべしる（總掌）つかさなり

はらへし（祓師）　はらへわざ（祓事）をおこなふ（行）つかさなり

てながをさ（手長長）　みけ（饌）をそなふる（供）つかさなり

てなが（手長）　みけ（饌）をてつぐ（手次）つかさなり

しどり（後取）　いはひぬし（齋主）、いはひのすけ（副齋主）につきて（屬）、もの（物）をて（手）つぎ（次）、こと（事）をたすくる（助）つかさなり

みけし（調饌師）　みけもろもろ（諸饌）を、をさめととのふる（調理）つかさなり

よそひし（裝束師）　まつりつもの（祭具）をつくり（造）、また、まつりどころ（祭場）の

もろもろ（諸般）のよそほひもの（装具）をよそひかざり（装飾）、また、のりと（祝詞）、たまぐし（玉籤）など（等）を、しりとり（後取）につたふる（傳）つかさなり

ことしりびと（典儀）　まつりわざ（祭事）もろもろ（一切）を、をさめととのふ（整理）るつかさなり

ことゝりびと（賛者）　ことしりびと（典儀）をたすけ（輔）て、まつりわざをとゝのふるつかさなり

これ（此）らのかみ（以上）は、つね（恒）にありこし（在）つかさ（職）にして、たゞ（唯）なを（名）あらため（改）つるのみなり

はふりのおほづかひ（葬事大使）　いはひぬし（斎主）にさきだち（先）て、もや（喪家）にいりて、まだき（豫）に、もろもろ（諸）のこと（事）をさだめ（定）、まだき（豫）に、もろもろ（諸）のもの（物）をとゝのへ（整頓）、あらかじめ（豫）こころえ（意得）おき（置）ては、えあらぬことどもを、もびと（喪人）にをしへしめす（教示）つかさなり

はふりのそひづかひ（葬事少使）　おほづかひ（大使）をたすけ（輔）て、まだき（豫）に、ことどもを、さだめおきて、はふるつかさなり

その（其）しるところ（職掌）いと（甚）おほし（多）　ひとつ（一）には、もをさ（喪事長）、もをさ（喪事長）のそひ（補）ごとをさだむ（定）　ふたつ（二）には、もをさ（喪事長）やは（議）ありて、

もぬし、もめをさだむ　みつにハ、あらきわざ、をさめわ
ざ、うづめわざのこゝろえをしめし、またそのおぼえが
きをしるす　よつにハ、ものつくりのをさ、ものつくり
びとをさだめて、かりもや、またはふりつものつくり
かたをしめし、またそのかたのきをわたす　いつゝに
ゝ、はふりのつらなみの、びとをさだめ、またそのつら
ぶみのかたをわたし、そのつらのたてざま、とゝのへざ
ま、またもや、かりもやのよそひざまをしめす　むつに
ゝ、あなほりびとをさだめて、はふりあなほりざま、ま
た、はかどころのきづきかた、よそひざま、ならびに、そこ
に、あらかじめそなへおくべきものなどのことをしめ
す　なゝつにハ、ものつくりどころ、はかどころをみま
はりて、よしあしをこゝろみとゝのへしむ
このつかさハ、みぎのごとく、あづかることいとおほし、は
ふりわざのとゝのふも、とゝのはざるも、うるはしきも、う
るはしからざるも、すべて、このつかさの、てのとゞくとゞ

このざるとにあることにて、かならずしもなくてかなは
ぬものならばおくべし
あそびべ　あらきのむろにいりて、かくりと、あらはと
そのさかひにありて、なぬかなぬよみけみきをそなへ、
また、ひふみはかむごとをとなへ、またもびとがこころを
ゐて、ひとふたのうたをとなへて、みたまをなぐさむるつ
かさなり
このつかさのことは、いにしへ、いくめのすめらみこと
のみおやしだねに、つぶらめのみこがまをすみこと、やま
とのくに、たけちのこほりにおはし、そのみめに、いがの
ひじきわけのむすめがまをすがおはして、すめらみこと
のあらきのみやにつかへまつりしをはじめにて、よ
よつかへまつりこしつかさなり。はつせのすめらみこ
との、かむあがりまししときに、そのうぢびとたえて、な
ぬかなぬよみけをたてまつらざりしによりて、おほ
みたまのいたくあらびたまひしからに、くにぐにに、そ

はうぢびと（氏人）をたづねもとめ（尋求）て、つかへまつら（供奉）しめたま
ひしのぞ、みあら（荒）びなご（和）みたまひしもし、りやう（令）は、はふ（喪）
りわざ（葬）はくだり（條）のしふげ（集解）にみえ、またほか（他）のくだり（條）に
もみえて、なべ（並）てならぬつかさびと（職員）なり。かれいま、いに（古）
しへにたちかへ（復）りて、この（此）つかさ（職）をたて（立）ゝ、なき（亡）たま（靈）を
なぐさ（慰）むることゝはなしつ

うたびと（樂人）　ふえふき（笛吹）、つゞみ（鼓）うちて、うた（樂）をかなづる（奏）つか（職）
さなり

もやにつくつかさびと（喪家屬職員）はわかち（辨別）

もやにつき（喪家屬）て、はふりわざ（葬儀）をすべしり（總掌）、はふり（葬事）のおほ（大）
もをさ（喪事長）

つかひびと（使）、とも（共）にはかり（議）て、もろもろ（百）のこと（事）をさだめ（定）、ま
た、ことしりびと（典禮）、まつりわざ（祭事）をはかり（議）、また、もぬし（喪主）もめ（喪婦）
をみちびき（導）て、こと（事）をとゝのへ（調）、また、もびと（喪人）もろもろ（諸）をゐ（率）
て、しぬびごと（誄辭）をまをし（白）などのこと（事）に、つかふるひと（仕人）なり

もをさのそひ（喪事補）　もをさ（喪事長）をたすけ（助）て、こと（事）をとる（執）ひと（人）なり

こときゝびと（聽事者）　いはひびと（齋人）はちかきむしろ（近席）にさもらひ（侍）て、こと（事）を

きゝことをかよはすひとなり
ものつくりのをさ　はふりわざおほづかひのことをうけて、はふりつものをつくることを、すべたるひとなり
ものつくりのをさのことをうけて、かりもやをはじめはふりつものをつくるひとなり
ものつくりびと
はふりのつらとゝのふるびと　はふりづかひよりことをうけて、はふりのつらをさだめ、つらぶみをつくり、よそひつものをあづかり、そをつらなむるつゞで、また、つらびとつゞでをさだめて、つらびとにつげ、ならはしをしめし、はふりのひにいたりては、ならはしをゐて、もやのよそほひをかざり、はふりゆきのつらをとゝのへ、かりもやをよそひすべて、ならはしどもを、あづかりをさむるひとなり
ひつぎならはし　ひつぎをかたげゆくものなり
よそほひものならはし　つらとゝのふるびとのことをうけて、よそほひものをよそひ、またもちつらなめて、はふりのつらにいりてゆくものなり

つかひよほろ　もろもろのつかさびとのことをうけて、
たちはしりて、ことをたらはすものなり

はふりのひときのかむがへ

ひとしぬれば、あらきのひかずをさだめて、そのあひだ、ねもころにつかへ、それすぎてはふりわざおこなふことなり。あらきのひのかずは、すめらみことのみうへにては、つきをかさねてみもをとどめたまひ、そのみわざは、なぬかなぬかよせさせたまひしなり。そは、かみにいへる、あそびべのことをおもふべく。また、くじき てんそんほんぎに、にぎはやびのみこと、すでにかむあがりましぬ。そのところ、そのみのかばねをおきて、なぬかなぬか、あそびかなしみて、あめにをさめまつりきとみえ、れいいきに、すがるのみまかりしとき、すめらみことみことよりして、とどめて、なぬかなぬか、かのいさをゝながめしことみえたまふことも ありて、おほかた、なぬかなぬかのあひだとみえたり。されど、しなたかきいへいへにては、そのいへのさだめによりて、ともかくもあるべし。さてまた、かみつしなはさ

○はふりのしもつまき

もあるべけれど、なかのしな、しものしなにいたりては、ふつかのうちにても、みかのうちにても、よきをりよろしきにしたがひてさだむべくぞ、それわざをへて、それのつき、それのひをさだむべきなり。そがなかに、いやしきしものしなにいたりては、みまかりしひに、あらきも、はふりも、ひとひにするもさまたげなし。このは、やまとぶみ、あめよろづとよひのすめらみことの、はかづくりののりを、さだめたまふところに、たゞびと、しにしとき、いふことに、ひとひもとゞむることなかれども、あるをおもふべし。しかあれども、つらつらかむがふるに、いにしへかゝるみおきてありけむとも、おもえど。たとひ、たゞびとなりとも、しにゆくひとを、したひかなしむこゝろは、おなじきをこゝに、かくあるは、いとうたがはしきことなり。さて、ときは、これをたがへしとは、なしがたきことゝしるべし。はゆふひいるころより、よるにかけておこなふを、たゞしとせり。そは、まんえふしふのふたつのまき、しきのみこ、かむさりましゝときよめるながうたのすゑに、「すめろぎの、かみのみこの、いでましの、たびのひかりぞ、こゝだてりたる」とはべるは、たびといへる、よるなることしるく、また、じふかいゑまき、そのほか、はふりゑまきにも、みなたいまつをもてるかたあり。このゑまきどものこと、しものゝはふりのつらのかむがへに、くだりに、くはしくいふを、みるべし。また、いせも

はがたり　みそぢまりここのつのくだりに、たかきてゞまをいはまそかりけ
り。そはみこうせたまひて、みはふりのよ、よそのこゝろやなり。ま
た、やまとぶみ、あめとよたからいかしひたらしひめのすめら
みことは、かむあがりませるところに、ひつぎのみこ、すめら
みことのみもをうつしまつりて、此ハ、あらきのみやにうつしまつりてなり。いは
せのみやにかへりいたりまして、このゆふべ、あさのところやある
なきがらをもて、ゆふべよりよるへかけておこなふべきなり。さ
か、あれども、そのはみはてては、もやはたゝりあしきことやすく
なのらざれば、うまちりはちゝ、いつまでも、さまたげなきこ
とゝす

まつりつかはのかむがく

おほぬさ　ぬさは、かみのみまへにたてまつるものにこそ
あれ。けがれをきよむるものにはあらざるべし。ふるくは、ぬ
さおく、ぬさたてまつるなどいへるごとし。さてまた、そ
のぬさに、あさをおほくもちゐたるゆゑに、あさをも、ぬさ
といふなるべし。さかるに、いつのころよりか、ふるくより、お

にぬさ、きりぬさなどいひて、はらひきよむるものなり
しかみえたれど、まことは、あたらぬことなるぞおもはるる。
これ、おほはらへは、すがのそなどなり、やうやうにうつりこ
しものにもあるべくや。まんえふしふに、すげをてにとり
もちて、はらへするよしのうた、かれこれあり。また、おほは
らへは、すがそを、あさにかへて、もちゐしことありしよし、
あるふみにみえたり。さるどまれ。あさは、かの、いはどがく
れのときに、にぎてにも、もちゐきたりて、いときよらなるも
のなるに、そを、ふさやのによりつけたるさま、めにみえぬ
ばかりなる、ちりゐるをも、はらひきよむべく、おぼゆるものな
れば、つねのならひには、もちゐることとなりて、その名の、
あたりあたらぬに、かかはらず
しほゆ　がうけしだいに、ちよくししんぱつのくだりに、しほ
ゆをそそぎ、おほぬさをたてまつるよしみえたり。されば、こ
れもふるきならひなり。つねにゆにしほをまじへてもち
ゐきたれり。これ、いざなぎのみことの、よもつくにのけが

○はふりのつゑもつまき

れを、はらひ(拂)たまはむ(賜)として、ひむかのたちばなのをど(日向之橘小門)に、おりかづきて(下潜)、みそぎはらへ(身禊祓)たまひし(賜)、ふること(古事)よりおこ(起)りしわざ(事)なるを、おもひえ(所思)たり。されば、まこと(實)は、うしほ(潮水)をもちふ(用)べきなり。なき(無)ときは、しほみづ(鹽水)にかふ(代)べし。ゆ(湯)をもちふる(用)は、よのつねのことわり(本理)にかなはぬ(叶)ことなり。よのならひ(世習)として、もの(物)をあらふ(洗)にも、けがれ(汚)をきよむる(清)にも、つね(常)に、しほ(鹽)をもちふる(用)も、そのもと(原由)は、おなじ(同)かし。されば、しほゆのゆは、いむ(忌)こゝろのゆにやともおもはれ(所思)ず、このゆを、ことば(語)のしも(下)につけ(附)て、いへるためし(例)なし。なほ(猶)かむがふ(考)べし。かれ(故)、いま(今)は、な(名)にかゝはらず(拘)、ことのもと(原由)によりて(従)、しほみづ(鹽水)をもちふ(用)

たまぐし(玉籤)　あまてらすおほみかみ(天照大御神)の、あめのいはや(天石屋)に、さしこもり(幽居)ましゝとき(時)に、あめのかぐやま(天香山)の、いほつまさかき(五百箇眞坂樹)を、ねこじ(掘)にこじ(掘)て、ほつえ(上枝)に、みすまる(御統)のたま(玉)をとりかけ(懸)、なかつえ(中枝)に、やたかゞみ(八咫鏡)をとりつけ(著)、しづえ(下枝)に、あをにぎて(青和幣)しらにぎて(白和幣)をとりしで(垂)、ふとたまのみこと(太玉命)、ふとたまぐし(太玉籤)

ともちさゝげ（持捧）つかへまつり（仕奉）しなむ、ことのもと（原由）ゆゑあり
ける。いま、かゞみ（鏡）、たま（玉）八、あり（有）もあら（有）ずも、たまぐし（玉籤）として
もちうる（用）なり
しりくめなは（端出之縄）、また、しめ（注連）。いま（今）、しめとのみいへ（言）るは、すなは（則）
ち、しりくめをはぶき（略）ていへ（言）るなり。これも、いはやがくり（石戸隠）
のとき（時）に、もろ／＼（諸）のかみたち（神等）、かむはかり（神議）にはかり（議）て、く（品）
さゞ／＼（種々）のもの（物）をそなへ（備具）、さまざまに、をぎわざ（招事）つかへま（仕奉）
つりて、おほかみ（大神）をいでませ（幸）まつり（奉）しとき（時）に、こゝ（是）より
なかへり（勿還）いりまし（幸）ぞと、いはやと（石屋戸）にひきわたし（界）たまひし
を、ことのもと（原由）ゝして、かみまつり（神祭）にも、さなき（然無）にも、ひろく（廣）、
なにごと（何事）にももちゐる（用）ならへ（習）り。かれ（故）いま（今）も、くさ／＼（種々）のもの（物）
のにとりかけ（取懸）て、もちうる（用）なり

みたま（霊）のまへ（前）にまをしことば（白詞）とものかむがへ（考）

ひとふたうる
ひとふるみよ　いつむゆなゝや　こゝのたりや（此の訓み紀年十ねんぢう）

ぎやうじ（行事）ひし（秘鈔）やうより（従）きり

これうた(此歌)、くじき(舊事紀)の、にぎはやびのみこと(饒速日尊)のみあもり(天降)み
くだり(條)に、あまつかむみおやみことのり(天神御祖詔)に、あまつしる(天璽)
しみづだから(瑞寶)とくさ(十種)をさづけ(授)たまひて、いはゆる(謂)、おきつ(瀛都)
かゞみ(鏡)ひとつ(一)、へつかゞみ(邊都鏡)ひとつ(一)、やつかのつるぎ(八握劔)ひとつ(一)、いく(生)
くたま(玉)ひとつ(一)、まかるがへし(死反)たま(玉)ひとつ(一)、たるたま(足玉)ひとつ(一)、
ちがへし(道反)たま(玉)ひとつ(一)、をろちひれ(蛇比禮)、はちひれ(蜂比禮)、くさぐさのもの(品々物)
のひれ(比禮)ひとつ(一)、これ(是)なり。あまつかみ(天神)のをしへ(教)たまはく。
もし(若)、いたむ(痛)ところ(所)あらば(有)、これ(此)とくさ(十種)のたから(寶)をもて(以)、ひ
とふたみよ、いつむゆなゝや、こゝのたりやと、いひて(謂)ふる(布瑠)
へ、ゆらゝゝ(部由良々々)とふるへ(布瑠部)。かくしをせば(如此之為)、しにびと(死人)も、いきかへ(生返)
りなむとあるぞ、これうた(此歌)のもの(物)みえ(見)たるはじめ(始)なり
ける。かくて、これ(此)ことのよし(原由)をかむがふる(考)に、ちかく(近)は、お
ほみかど(朝廷)にて、としごと(年毎)には、おこなはせ(行)たまへる(賜)、みたまふ(鎮魂)
りまつり(祭)に、あめのうずめのみこと(天鈿女命)のはつこと(斎)なる、さるめ(猿女)
のきみ(君)ら、うけふね(槽)をつき(突)て、このうた(此歌)をうたふ(唱)ことぞ、ふる(古)
きふみ(書)ども(等)にみえて、あきらけし。また、こごしふゐ(古語拾遺)に、すべ(總)

て、みたまふりのりハ、あめのうずめのみことの、のこれる
あとなりとありしかれバ、これよりさきとほきかみよに、
うずめのみことそれ、あめのいはやどのまへにて、うけふね
をふせて、そのうへにたゝして、ほこもてつきつゝ、うたま
ひしたまひし、かむわざをつたへたるものなるべし。かゝ
れバ、たえずもれざるも、このときにも、このうたを
うたひつゝものしたまひて、をぎまつりしことしるくま
た、はやく、ものをかぞふるなどもなりしとみえて、かのふ
たばしらのかみの、くにうみなさむとして、みとのまぐは
ひしたまふときに、いざなみのみことの、わがみは、なりなり
て、なりあはざるところ、ひとところあり、とのりたまひ、いざ
なぎのみことの、わがみは、なりなりて、なりあまれるとこ
ろ、ひとところありとのりたまひ、また、いざなみのみことの、
ひのかみをうみたまハむとして、いはがくりますときに、
ひるなぬか、よるハなゝよ、あをなみたまひそとのりたまひ、
いざなぎのみことに、このひとつげにかくつることものゝ

○はふりのつとめつまき

りたまへり。こゝらをもて、つらつらにかむがふるに、この
うた、あめつちのはじめのときより、かみがみのうへにお
こなはれて、つひに、ものをかぞふるなかにもなりしなるべ
し。そも、いかにして、しかなれるぞや、いふに、このうたのこ
ころは、いかなるこゝろのしられねども、うかれありくたま
しひををぎて、みうちのなかごにしづむるバ、のりれ、たふ
ときみまつりに、もちゐさせたまへるをもてみれバ、いの
ちをのべ、わざはひをさけ、さきはひをまねく、いともたふ
とく、くしびなるみしるしある、まじなひうたなるからに、
つねにとなへて、そのみしるしをかゝぶらせましとの、あ
まつかみのかむはかりによりて、しかさだまりしなるべ
し。されバ、いはやどのまへにても、うたひまひ、またとく
さのかむだからをふるふにも、となふることゞらなりし
なるべし。そもそも、このうた、かゝるいはれあるゆゑに、い
まもちゐて、しにゆくたまをなごめ、さきはひをも、えし
めむとするなり

ひふみうた

ひふみよい むなやこともち ろらねしき るゆゐつ
わぬそ おたはくめ かうをえにさり へてのます
あせゑほれけ

こ(此)ハ、よそ(四十)まりなゝ(七)こゑ(音)もて、つら(連)ねたるうた(歌)なり。かみ(上)のうた(歌)ゝ、みじか(短)のうた(歌)、これ(此)ハ、なが(長)のうた(歌)ともいふ(謂)べし。この(此)うた(歌)、まづ、はじ(始)めのとこゑ(十音)に、それ(其)ひゞき(韻)をそへ(加)て、ひいふう みいよお いいむう なあやあ こおとお といひ(言)て、もの(物)をかぞふる(計)ことば(詞)ともなれるに、かみ(上)のうた(歌)とおな(同)じく、たふ(尊)ときうた(歌)なるゆゑ(故)に、かみ(神)のみこゝろ(慮)とゝして、おの(然)づからおもむ(赴)けたま(賜)へるなるべし。このうた(此歌)も、もの(物)にみえ(見)たること(事)なし(無)。たゞ(唯)くにぐに(諸國)のふるき(舊)かむやしろ(神社)にまれまれ(稀)につた(傳)ハれり。みな(皆)かみよ(神代)もじ(文字)にてかけ(書)り。つらつらかむがふる(按)に、なかむかし(中古)から(漢)まなび(學)さかり(盛)におこな(行)はれて、なに(何)ごと(事)も、からもじ(漢字)もて(以)かく(書)ことゝなりき(成來)ぬるを、たまたま(適)かみよ(神世)よりつた(傳)はりこしもじ(字)の、すたる(廢)ゝををしみ(惜)は、あ

この(此)うた(歌)の、よ(世)にたえ(絶)なむこと(事)をなげく(歎)もの(者)ありて、ふる(舊)きかむやしろ(神社)をたのみ(頼)にして、かきて(書)をさめ(納)たるものぞおもへる(思)。かみ(上)のうた(歌)ども(共)に、その(其)こころ(意)のおもひえ(思得)られざるも、いともくすしびにたへ(霊異妙)なるもの、ひと(人)のよ(世)につたはら(傳)ざるなるべし。いにしへ(上古)おほはらへ(大祓)、まゐ、もひとり(氷取)のみわざ(行事)などに、のらせ(宜)たまひし、あまつ(天都)のりと(祝詞)ふと(太)のりと(祝詞)ごと(詞)いふ(謂)も、いかなる(何如)ことば(詞)にやありけむ。きはめて(必)、たふとき(尊)みしるし(霊験)ありしことなりけむ。

を、よ(世)にたえ(絶)てつたはる(傳)ことなき(無)は、いと(甚)もゝゝ(々)くち(遺)をしきこと(憾)なり。おもふ(按)に、この(此)うた(歌)も、さるたぐひ(類)のことば(語)に、まれ(稀)につたはる(傳)はきはめてあらじかし、いとたふとし(最尊)。かれ、いま、かみ(上)のうた(歌)とおなじく(同)もちふる(用)なり

のりと(祝詞)くはしく(委)は、のりとごと○○○○いふ。これも、いはやど(此石屋戸)のまへ(前)にて、ひろく(廣)あつく(厚)たゝへごと(称辞)まをし(白)はじめ(始)にて、かみまつり(神祭)には、かならず(必)、かみ(神)のみまへ(前)に、まをしごと(白事)なり。いま(今)、みたま(霊)のまへ(前)にてものる(告)なり。その(其)ことば(詞)を、も

○はふりのをしへのつまき

のにかける(書)をバ、のりとぶみ(祝詞案)といふべし。そのかけるさま(其文體)、

つね(常)ののりとごと(祝詞)ハ、ことのさま(事状)をくハしく(委)すべし。さり

とて、かなしみ(哀情)にすぎたる(過)も、なかなかにみたま(靈魂)をわづら(煩)

はすべければ、なぐさむる(慰)こゝろ(意)をむね(主)とかく(書)べし

しぬびごと(誄辞)　しにびと(死者)をしぬびて(偲)、それ(其)みたま(靈)につぐる(告)こ

とばなり。その(其)ひと(人)の、よにありし(世在)ときの、いさを(功績)をたゝへ(称)

あげてまをす(白)べし。これ(此)いとふるき(甚舊)わざ(式)にて、ぬなくらふ(淳中倉太)

とたましき(珠敷)すめらみこと(天皇)(敏達)の、かむあがりまし(崩坐)しときに、

あらきのみや(殯宮)にまゐでゝ(詣)、そがのうまこのすくね(蘇我馬子宿禰)、もの(物)

べのもりやのおほむらじ(部守屋大連)など、しぬびごと(誄辞)をまをし(白)しこと、

みふみ(正史)にみえ(見)たるをはじめ(始)にて、とよみけかしきやひめ(豊御食炊屋姫)(推古)

のすめらみこと(天皇)のみよ(御宇)より、あめのぬなはらおきのまひ(天淳中原瀛眞人)(天武)

とのすめらみこと(天皇)、たかまのはらひろのひめ(高天原廣野姫)(持統)のすめらみ(天皇)

ことのみよ(御宇)ごろまでハ、あらきのみや(殯宮)にまゐり(參)て、おみた(臣等)

ちもろもろ(諸)、ついで(次)にしたがひ(随)て、すめらみこと(天皇)のみたま(靈)

のまへ(前)に、まをしまつり(白奉)しこと、みえ(見)たり。それより(其以)のち(後)

さ、このことはみてぶりかへりて、もはら、みおくりなをたてまつるたゞみ、まをすごとくになりけり。かくて、ここをまをせるさまは、みこたち、おみたち、みづからまをすこともかたくて、ひとはかはりてもまをし、また、しぬびびともろもろをひきゐても、まをせることなり。しぬびびとをひきゐてまをせるを、おほかた、みつぐらゐ、よつぐらゐのひと、また、なかのものまをすつかさ、おほまつりごとびとなど、つとめしなり。これらのことは、みよゝのみふみにみえて、いとおごそかなりしことなり。かゝれば、いまも、あらきのうちに、うから、やから、おのおのまをすべきなれど、さて、たよりあしければ、つひに、まつりのときに、もをさとあるひと、しぬびごとまをすべきうからやからをひきゐて、まをすこととす。そのまをすことばは、ことしげきなのなれば、もやまでは、おほかた、とゝのへかぬべければ、かねて、いはひごとはかるまで、かきとゝのへ、もてゆきてあるふるをことゝす。また、もをさ、そのほかのひとびとに

もまをすべきわざを、ひとなきのちむみは、いはひのすけな
がかはりてまをすもさまたげなし。たゞしまつりにあづ
からざることなれば、ねぎのはくハ、もやにつけるひとにま
をさせまほしきことなり。このことばは、のりとにかはり
て、しにびとをしたふこゝろはやみがたく、なげきかなし
むさしを、ぬしがかくべし。これ、のりとことなるゆゑよ
しなりけり

うたのかむがへ

うた　たのしみかなしみのなかのみち、にあはしからざるが
ごとし。しかあれども、かみよのみふみに、かの、あめわかひ
こがものことを、やかやよかなしみうたふをいひ、（このこと、ふることぶみにハ、ひやかやよあそぶとみえたり）また、いざなみのみことかむさ
りましぬることをいひて、かれ、きのくにありまのむらに
かくしまつる。くにびと、このみたまをまつるには、は
なのときにハ、はなもてまつる。また、つゞみ、ふえ、はたをも
て、うたひまひてまつると、みえたるをはじめとして、ひと

よ（世）にはやりても、はふり（葬）に、ふえつゞみ（笛鼓）をもちゐ（用）、うたをか（楽奏）なでしことは、みふみ（正史）にみえ（見）て、いと（甚）ふるき（舊）みてぶり（風儀）なり。そ（其）のなか（中）に、いざなみのかみ（伊弉冊神）も、うじ（蛆）たかれ（沸）ころゝぎ（膿流）たるさ（體）まに、いざなぎのかみ（伊弉諾神）は、みそなはし（眼見）みえましつゝも、うつし（現）みをもて、よもつくに（泉國）にましゝしことは、いちじるけれ（著明）ば、こゝ（此）にみつたへ（傳）たる、まぎれ（紛）たるものなきぞ、かみよ（神代）ようり、かく（如此）あるならひ（風俗）なりし、あかし（證）やはすべきなり。また、ふることぶ（古事記）みに、かの（彼）やまとたける（倭建）のみこと（命）は、かむあがり（崩）ましゝときに、そのきさき（后）たち（等）、みこ（御子）たち（等）は、かなしみ（哭）うた（歌）うたひたまひ（曰）しみうた

なづきのたのいなからに、はひもとほろふ
ところづら

あさじぬはら、こしなづむ、そらはゆかず、あしよゆくな
うみがゆけば、こしなづむ、おほかはら、うゑぐさ、うみがはいざよふ

はまつちどり、はまよはゆかず、いそづたふ

○はふりのやうもつまき

これらのうたゞ、すめらみことおほみはふりのとき、
うたひたまへるらしくみえたり。さて、かくいにしへより、は
ふりにあそびをもちうるは、いかにといふに、かなしみの
なかにも、なきたまをなぐさめむとてのわざなり。うから
やからのうへにては、かなしみにたへざるも、かたはらの
ひとはかくはありけむ。いまは、いはひぬしはまつりわざを
して、ふるきかなしみうたなどとりいでゝ、またなきたまを
なぐさめむがために、ひとふたうたなど、くりかへしうた
はするもよろしかるべし。しかあれども、いまは、さるわざ
つたふるひともなきにて、からぶりのみなるは、なげ
かはしきことなりかし

おくりなは、かみつよよりのならひなるあかし

おくりな　おくりなは、いとかみつよより、おこなはれきつ
るみのりにて、やまとぶみ、おなじくつぎぶみにしるせる、
みよゝゝのおほみなは、みなおくりな、また、たゝへみな
もてしるさせたまへり。そは、おきなかたらしひめのみこ

申　御名　追　尊　然　稱
やゝまをしみなを、おひたふとびて、そのたゝへまをせる

謚　事　著　大　倭　根子
くしなれバ、みおくりなゝることしるく、おほやまとねこ

天　廣野日女尊　倭根豐祖父　持統　天
あめのひろぬひめのみこと、やまとねこおほぢのす

天　皇　天璽國押開豐櫻彦　文武　天
めらみことハ、あまとしるしくにおしはるきとよさくらひ

尊　天宗高紹　聖武　尊　天　白　御名　皇
これみことを、あめむねたかのつぎれみことながまをしみな

皆　謚號　光仁　云々　天皇　白　然　御世
なみな、おくりなハそのごとまをすとあり。そのうゑ、みよ

繼　御名　同　然　稱　尊　號
つぎれみなも、おなじくそのまをせり。また、たふとみなを、

寶字稱德孝謙皇帝　稱
ほうじしようとくかうけんくわうてんわうたゝへまをせ

御世繼　御名　同　書　按　其
きバ、みよつぎれみなも、おなじくしるせるをおもふよ、そ

他　御代　御名　追　尊　云々
のほかのれみよよれみなも、おひたふとびて、そのごとくと

尊　云々　言　漏
のたふとびてそのごとくとの、いふことれもれたるよて、お

謚號　或　尊　號　明　神日
くりな、あるハ、たふとみなゝることとゝきらけし。かむやま

本磐余彦　天　皇　白　尊　號
とゝはれびこのすめらみことゝまをしも、みたゝへなほ

日本紀　古　語　稱　曰　於畝傍
るこそハ、みよふみよ、ふることよおきてまをさくうねびの

之橿原也太立宮柱於底磐之根峻峙搏風於
かしはらみ、そこつゆはねよみやハしらふとしきたてた

高　天　之　原　而　始　馭　天　下　之　天　皇
かまれハらふちぎたかしりてはつくにしらすすめらみ

○はふりれのことしもつまきく　○

號曰神日本磐余彦火火出見天皇
こゝを、かむやまといはれびこほゝでみのすめらみこと
とまをしまつることあるにていちじるし。これよりのちは、
著明此以後
漢風諡號更賜日本
からぶりのみおくりなを、かへさせたまひければ、のちの
後紀以下御紀上代用
やまとぶみよりしものみふみらは、かみつよよりもちゐさ
せたまひし、いにしへぶりのみおくりなをばやめて、なに
古風諡號廢何
天皇書奉
てんわうとかきしたてまつれり。これも、みおくりなもて
かゝんべき、さだめなりけれバなるべし。かゝれバ、かむや
書定神日
本磐余彦天皇天宗高紹
まといはれびこすめらみことより、あめむねたかつき
神武天皇 光仁天
天皇五十代大御名皆
のすめらみことまで、いそみよのあひだのおほみなゝみ
皇國古風尊號即
な、みくにのいにしへぶりのみたゝへなにて、すなはち、み
諡號等思定其
おくりなにひとしきことをおもひさだむべきなり。それ
御名體然思量奉此
みなのさまも、しかおもひはかりまつられたり。さて、これ
諡號大后王賜
みおくりないしも、おほきさき、みこたちにもたまはりま
◆臣等賜正史見庶
た、おみたちにもたまはりしこと、みふみにみえたり。たゞ
人書見上下
びとら、ふみにはみえざれども、かみしもならふしも
其分く必用
なれバ、そのわかちゝゝみ、かならずもちゐてありけむかし。

それまた、ほうしらが、さかしらにつくりなせる、かなたざまのおくりなにひきかへられて、やみにしにもやあらむ。そもそも、みくにぶりのおくりなの、なかむかしまでもおこなはれしこと、かくのごとし。いま、よろづいにしへにかへさせたまふ、おほみよにしもに、このことも、いにしへにひきかへして、しなたかきあたりはさらなり。たゞびとにいたるまでも、さゝげあたふることゝさだめつ。しかして、これをあたふるに、むつのしなあり。これをえらぶに、とを

のならひあるなかは、ことども、ことふみにしるさむとすれば、こゝには、もらしつ

● みたましろのかむがへ

みたましろ　これぎしきちやうよりくはしきはあらじ。そのおほかたをいはむに、うちつみやのみあひどのにましまし、あめのたぢからをのかみ、ゆみにまし。よろづはたちゞひめのみこは、つるぎにましし、あらまつりのみや、いざはのみや、たきはらのみや、またたなべのやしろ、かのゝや

鏡 其他諸社
しろハ、かゞみにましゝ、そのほかもろ〳〵のやしろも、みな

石 趣 御鎮坐本記 外宮
いしにますよしなり。また、ごちんざほんきに、とつみやの

御相殿 兒屋命 笏 太玉
みあひどののまへに、こやねのみことは、さくにまします。ふとだ

命 玉座 筑前風土記
まのみことは、たまにましますとあり。また、ちくぜんふどき

宗像大神神體 以青
に、むなかたのおほかみのかむざねは、ことをもひて、あを

蕤玉置奥宮之表 以八尺紫蕤
だまをおきつみやのしるしにおき、やさかにのむらさきに

玉置中宮之表 以八咫鏡置
たまを、なかつみやのしるしにおき、やたかゞみを、へつみ

邊宮之表 以此三表成神
やのしるしにおき、これみつのしるしをもて、かみのみ

體之形 納置三宮 即隱之
のかたちとなし、みつのみやにをさめおきて、これをいはふ

畏 亡者靈魂
こともあり。されば、いまかしこかれども、なきひとのみたまし

准事定
ろも、それになぞらふることさだめつ

靈璽裝束
　みたましろのよそひつかねのかむさく

船代 延喜式伊勢大神宮 條
ふなしろ　えんぎしき、いせのおほかみのみやのくだりに

日 大神宮 船代 三具一具 正宮
いはく。おほかみのみやのふなしろみつ、ひとつは、まさみ

料 長七尺二寸内五
やのふなしろなり。ながさなゝさかあまりふたき、うち、い

尺 七寸 廣二尺 五寸 内
つさかあまりなゝき、ひろさ、ふたさかあまりいつき、うち、

ふたさか（二尺）、たかさ（高）、ふたさか（二尺）あまりひとき（一寸）うち（内）のふかさ（深）、ひ（一）
とさか（尺）あまりよき（四寸）なり。ふたつ（二具）ハ、あひどの（相殿）のかみ（神）のふな（料）
しろなり。おのおの（各）、ながさ（長）、なゝさか（七尺）あまりむき（六寸）うち（内）、な（七）
ゝさか（尺）あまりむきだ（六分）、ひろさ（廣）、ひとさか（一尺）あまりいつき（五寸）う（内）
ちのふかさ（深）、ひとさか（一尺）あまりいつきだ（五分）、たかさ（高）、ひとさか（一尺）のあ
まりなゝき（七寸）、うち（内）のふかさ（深）、ひとさか（一尺）なりといへり（云）。されバ、
ながく（長）よつのかど（四角）なるものとみえたり。ながさ（長）、ひろさ（廣）たがひ（異同）
あるハ、まさみや（正宮）のかたハ、みひしろ（樋代）をおさめ（藏）、みあひどの（相殿）の
かたハ、たゞちに（直）みたましろ（神霊）をおさむる（藏）を、そのみたま（其神）
しろのかたち（霊形）、おほきく（大）ませ（坐）バにやあらむ。これ（是）にしたが（随）
はバ、いま（今）も、よかど（四角）に、なが（長）く、ちひさ（小）く、つくる（製）べきなれど
も、そゝなかゝゝふかしとけれ（艮）バ、ちひさ（小）き、からひつ（辛櫃）のかた（形）
につくる（製）をさだめとす

ひしろ（樋代）　かみ（上）に（文）ひける（引）ことばの、つぎに、ひしろ（樋代）ひとつ（一具）、ま（正）
さみや（宮）のなり（料）。たかさ（高）、ふたさか（二尺）あまりひとき（一寸）、ふかさ（深）、ひと（一）
さか（尺）あまりよき（四寸）、うち（内）のわたり（径）、ひとさか（一尺）あまりむき（六寸）み（三）

きだ、はゞわたり、ふたさかなりといへり。こハ、ふたさかのよ
おもはみえたり。それまゝにうつしつくらむハ、いともか
しこきわざなれバ、いまハ、ちひさきひのまげものをもち
うることゝす。さはれども、やはりのぞみよりてハ、みたまし
ろのかたち、さまざまなるべければ、あらかじめさだめが
たし。ときのよろしきまにまにしたがひてさだむべし
これらハ、かねてはふりのおほつかひ、もをさにつげて、も
やにて、みたましろをさだめしめ、それにならひて、ひしろ、
ふなしろをとゝのふべし。もし、みたましろよりはじめて、
それすぢのてのつくりびとにいひつけて、あらたに、つく
らせなむには、それあつかひざまをこゝろえざれバ、あ
やまつことあり。そハまづ、ふなしろをひらきて、ひしろを
いだし、ひしろのおひをのぞき、ひしろをひらきて、みたま
しろをいだし、みたましろぶくろのひもをとき、みたまし
ろをいだし、いかにも、きよきみづもて、いくたびもあらひ
きよめ、しろきぬのをみづにひたし、かたくしぼりて、やはら

にぬぐひて、よくみづけをさるべし。さて、ふくろのうちをも、おなじぬのもて、ぬぐひきよむべし。きよめをはりて、もとのごとく、みたましろををさめ、もとのごとくひもをむすび、ひしろにをさめ、おびをかけ、ふなしろにをさめおくべし。かくて、そのふくろのひものむすびざまにならひあり。かねて、こゝろえおくべし。こゝろえなくして、ことにつきて、もとのごとくむすびえざらむハ、おもぶせするわざなり

をさめつものゝかむがへ

うめわた　こじきでん、あめわかひこがものくだりに、やまとぶみなるわたつくりのことをひきて、しきに、わたつくりハ、いま、わたをもてみづにひたし、しにびとをあらひとをいふにこそといへれど、そればかりのわたに、いといさゝのなれバ、それつくるもとめて、ことにあつべくもあらず。かれおもふに、しにかばねのゆるがざらむためにひつぎのうちのあきたるところを、かみつよにも、わたして

ぞうゑけむ。そのわゐハ、おおくいるこゝなれバ、それつく
るかれをいふふやゝいはきたり。いまゝ、これふ志たがひ
て、このかれをバもちうるなり
いみ由いみをけ　志かばねをあらふこゝハ、すでふもいく
るごゝく、ふるくもありしこゝゝゝみゆるかれふら、それ
はゐ、からざまのうつきるかれふて、いたく志ふびゝをわ
づらいすわざなきバ、いまゝ、ゐぶ、ふくこゝゝさゐゑつか
き、このかれをもちうるこゝゝなれるなり

はふりつものれかむがへ

ひつぎ　やまゝぶみれずさのをれかみの、やそこだねをも
ちくだして、まきわゝこしたまふくゞりふ、まきをゞうら
志きあをひゝぐされおきつすたべふふさむそなへゝす
べしゝあるゝ、すなハちひつぎこゝのかれふみえたる
はじめなり。こゝふふさむそなへゝあるハ、いはゆるふし
きゝきこえたり。のちれかれなゞらみはふりぶみゝいふ
かれふ、みひつぎれこゝをいひて、なゞのさ、むゆさのあまり

みき、ひろさ、ひとさかのあまりやき、たかさ、ひとさかのあまり
むゝきなるがあれど、むかしハ、みなふしきなりしとみえた
り。いま、これにしたがふ。いしきにてもおなじ
おほきは　わみやうせうに、ひつぎにそぐらすとあれなり
もあり。こハ、ひつぎいるゝばかりにおほきくつくるべし。
まゝ、いしもてつくるもあり。みさゝぎぶみに、いしのおほ
きのたけをしるして、よこ、みさかあまりいつき、ながさ、
こゝのさか、あるハ、ながさ、ひとつゑあまりいつさかの、よこ、
よさかあまりよき、たかさ、いつさかあまりむゝきなどし
るせり。これハ、ひつぎだにあつくかたくつくりたらむ
にハ、かくもさまたげなし
しるしいし　こハ、うせにしひとの、よにありしあひだ、
ことのあとゝ、みまかりしよはひ、また、とし、つき、ひなどを、
いしにきざみて、ひつぎにそへてうづむるなり。こハも
と、からぶりにならへるものとみゆれど、なかむかしよ
りもちゐきたり。はた、いまも、しなたかきあたりにては、

いしのみならず、あかがねもてするもあるよしなり。そ
のいへいへ、さだめにしたがひて、もちうるもよろし。
ついでなれバ、そへていふなり
きぐるま　やまとぶみ、あまよろづとよひのすめらみこと
のみまきには、そのみはかどころののりをのらせたまふところに、
みこたちよりかみつかたなるは、そのこと、それはふりのとき
のかたびら、かきしろハ、しらぬのをもちゐる、きぐるまあれ。
しものしな、かみつまへつぎみハ、しものしなになひてゆけと
みえたり。こハ、みこたちよりかみつかたなるのうへにて、き
ぐるまといふものありて、ひつぎを、それにのせて、ひきゆ
くことゝきこえ、まへつぎみたちのうへにてハ、たとひ、か
みつかたなりとも、きぐるまをバもちゐるに、ひつぎをこし
にのせて、になひゆくことゝきこえたり。また、さうさうり
やうに、おほそ、みこ、ひとつのしなよりみつのしな、また、ま
へつぎみたち、ひとつのくらゐよりみつのくらゐ、また、お
ほまつりごとのおほまへつぎみより、おほきものまをしに

つかさにいたるまでは、きぐるまをもちうるとしみえた
るに、このころすでに、そのみさだめかはれりとみえたり。
かくて、このくるまはこしを、さうげに、もぐるまなりとも、
もやをいふなりとも、さとびごとには、こやかたといふと
もあるにて、そのおほかたのさまは、しらぬたれど、つまび
らかならず。いへいへにつたへにしたがひて、いづれにも
あるべし

おほごし　かみにひけるよし、やまとぶみのことばに、かみつま
へつぎみ、しのところ、になひてゆけりとあり。またそのしるし
こがきに、けだしこれは、かたもてこしをになひておくる
のにありて、ひつぎをこしにのせてかたげゆくことろみ
えたり。おもふに、それこしは、いまも、かみざまにてもちゐ
たまへる。あげごしといふもれなりや。まだ、みもありにも
ちうることは、こしとれにやはしらねど、しもざまのはふ
りに、こしやなるもありて、それにひつぎをのせて、
かたげゆくあり。そのさま、はうしらずてに いでたる

○はふりのさまもつまき　○

ものはみえずて、ところ〴〵にかむやしろにある。み
こしは、みふねににて、はしらあり、やねありて、よもにおもにどり
ゐをたて、たまがきをめぐらし、それにかたぐべく、えをふ
たつけたるものなり。いにしへぶりのなごりなるべく
おもひあれば、いまゝこれをもちふ
よそほひものゝかむぐ
おほさかき　いはやがくりのときに、かみがゝりをぎわざ
に、ねこじさかきをもちゐたまへり。いまそれにならふ。
すべてのまつりわざに、さかきをもちふるも、そのもとは
おなじこと
はた　かみにひける、かみよまきの、いざなみのかみのみ
たまをまつるくだりに、つゞみふえはたもてまつれるよ
しあるぞ、いにしへはたをもちゐたるあかしなりける。
またさうさうりやうに、ひとつのしなのしなには、はたよもゝさ
を、ふたつのしなには、はたみもゝあまりいつさを、みつの
しなくつれしなゝら、はた、みもゝさを、ひとつくらゐは、ふ

よつのしなにならべ。ふたつのくらゐは、みつのしなにならべ。みつのくらゐは、はた、ふたもゝさをのみさだめなるよしみえたるにしたがへり。いろはたは、まんえふしふしやうにひける、ひたちふどきに、くろさかのみことのひつぎぐるま、くろさきやまよりたちて、ひだかみのくにゝいたる、はふりのよそほひ、あかはた、あをはた、まじはりひるがへりしかゝゝとみえたるによれり。いまは、つりはたひとさを、こはたは、とをまりよさを、よりしも、はふりのしにしたがふことゝさだむ。たゞし、いとかろきはふりには、かみばたをもちうるもさまたげなし

つくりばな　かみにいへる、いざなみのかみのみたまをまつるに、はなのときには、はなもてまつるとあるになずらへたるなり。これも、もやののぞみにしたがひて、いづきにもつくるべし。また、いとかろきしもざまのはふりには、かくもさまたげなし

からひつ　このものは、えんぎしきにもみえて、いとふるく

かみまつりにハ、もちゐきたれるものなり。いまもたより
よろしきまゝにもちう
ゆみやたちなぎなた　そのひとは、よにありしあひだ、つか
さくらゐによりて、もちゐ、また、まがものなど、よりこむを、
さくるためにもちうるなり。しもざまにても、もちうべき
にあらず

はふりのつらのかむがへ

はふりのつらのことハ、たゞしきふみにみえたることなし。
かの、あめわかひこが、ものゝくさりのことハ、もにつかふる、つ
かさどもを、いへるなれバ、こゝにとるべきにあらず。こゝに、
あるひとのうつしもてる、ふるくはふりわざのことを、しる
せるふみどもをあつめたるひとまきあり。いやはじめに、を
やまだのきよあがかくしもてりし、しんごんしうにつたは
るさうしきさほうといふをあげたり。そのなかに、いさゝか、
つらのかゝることもあれど、とるべきものなし。また、その
ふみに、ともののぶともが、かきいれたる、るゐじうざふれい

しふのふみあり。そのふみはちやうげんのくねんのとせ、いち
でうてんわうの、みはふりのつらをしるせるあり。こは、いと
めづらしきものなり。おほかたは、からぶりのみわざなれば、
こゝろはふさはず。つぎに、しのばずのふぐらより いでたり
ときこゆる、かむづかさのかみのはふりのかたちゑをの
せたり。そのさまは、いやさきに、はうさうふたりはゝきをも
ち、つぎにうちがね、つぎにくだのふえ、つぎにおほがね、つぎ
に、はらのふえ、つぎにおほつゞみ、つぎにはた、つぎにたて、つ
ぎに、つゑつきびとをたり、つぎにおほかう、そのうちにひつ
ぎあり。つぎに、なきめむたり、つぎにまた、つゑつきびとやそた
り、つぎにものまさ、つぎに、かきしろうちにをみなあまた、つ
ぎにまた、つゑつきびとよたり、つぎに、しゝびと、つぎにまた、
つゑつきびとよたりや、ついでたり。おのもゝゝえぼしを
き、しろきころもに、あさぎのさしぬきをつけ、ひものなきく
ろきはおりをきたり。もびとゝおぼしきも、ふぢごろもなり。
そのなかに、ものまさびと、しゝびとは、くろきうへのきぬに

かうぶりきて、あみいたごしもいふべき、あやしきこしのあり。このつら、ほしやうのうち、かきしろのうちに、ひとおほかるさまなれども、そのほかのは、すべて、ふたりづゝふたつらにたちならべり。おもふに、これかみよふることをおもひよせ、とつくにぶりをとりくはへて、くみたてたるものとおぼし。このかたにそへて、かむづかさのかみのはふりをいふ、ふたひらばかりのふみあれど、うけがたきことのみなり。つぎに、とものゝぶともがうつしつたへたる、じふかいのゑまきものあり。これは、ゑしんそうづが、ときのゑかきにかゝせたるものなるよし、はじめにしるせり。このかたがき、はじめに、えぼしひたゝれきたるものひとり、つぎに、しろきころもきて、すががさきたる、あやしげなるものふたり、つぎに、くろきころもきたる、あまほうしひとり、つぎに、たびもてるものひとり、つぎに、よろひきて、あるは、たちはき、あるは、ゆみ、やなぐひもてるもの、むたり、ほうしもなかばまじれり、つぎに、つゑもちたる、ふたり、つぎに、また、たびもてるひとり、つぎに、はたつ

ぎに、てんがいは、つぎに、からひつのさませるものを、いたゞき
もてるおむな、つぎに、うちがねをもてるほうしひとり、つぎ
に、ひつぎを、えぼしきて、ひたゝれにもすそつけたるごとき
ものをきたるふたりして、かたげたり。このすゑもありげな
れど、もらせるにや。ここに、つらなれるひとは、みな、わらぐつ
をはきたり。また、ひつぎのちかきにあるものは、ぼうがくを
つけたり。これ、ほとけざまのはふりわざなることは、いふも
さらなれど、もののぐつけたるものなどあるは、これいに
しへに、さるてぶりありしものなるべし。つぎに、きのくにい
とのこほり、しやうほうじにつたはれる、ゑまきものをのせた
り。これは、けさかけたるほうしさきにたち、つぎに、たひもち、
つぎに、ひつぎ、かたはらに、もののぐつけて、なぎなたもてる
ほうしひとり、つぎに、ものいたゞきもてる、あやしきものひ
とり、つぎに、つゞみのごときものもてるふたり、つぎに、ゆみ
もてるひとり、つらなみたり。ここに、つらなれるものは、ひ
つぎかたぐるものまでも、みな、えぼしひたゝれをきたり。こ

れも、かみのゑまきやおなじたぐひなるべし。つぎに、さうさう
きといふふみの、かけのこれるなりとて、なゝひらばかり
のふみをいだせり。えいちやうふたとせのおくがきあり
て、てんむてんわうのおほみよに、さだめたまひしのりなる
よしなり。いたうたがはしきことなり。みやうだいいちゐよ
りしも、じやうだいしゐまでのはふりのさだまりを、いたうあ
らくしるせるものなり。そのつられおほかたは、さきなみ、あ
ひかみたち、つりばた、かなしみのをふと、ともしかご、こしは
ゝきもちなどつらね、また、ものまされなもみえたり。みぎの
ふみども、みな、ふるきふみとは、みゆれど、うたがはしきのみ
ならび、そなはれるものなし。されど、そのほかなるべきものも
あらざれば、そのなかに、こゝろえてふりにかなへるをえ
らびとりは、はた、いとかしこきことなれど、かうけしだいのふみ
えたる、いはしみづ、ひえ、かもなどのみゆきのつらね、また、くら
ゐたかのきぬへこゝろえ、つらぶみなどを、かむがへあはせて、さ
だめつるなり。そのさまのくはしきことは、しものかゝるゑづき

のまきに、そのかたをいだすべけれバ、つきてみるべし。そが
なかに、ものまさ、しゝびとなどハ、いまだそのことをくハし
くせざれバもちゐじ。また、なきめ、かなしみをわざとなすなどハ、ふ
るきつたへにこそあれども、いまのよにハ、ふさはしからぬわ
ざなれバ、これもやらじ。つゑつきびとなどハ、これいにし
へにハ、ためしなけれど、からくにゝて、ちゝのもにハ、たけの
つゑをもちゐ、はゝのもにハ、きりのつゑをもちうることもあ
るにおもひよりて、それをひきかへて、しかなせるにや。かにか
くに、よしともおぼえずなむ。また、わらぐつはけるなどもあ
るハ、おなじたぐひなるべし。さてまた、はらのふえ、くだのふ
え、うちがね、おほがねなどハ、さうさうりやうにもみえたる
こと、かみにいへるがごとくなれバ、いとふるきならひとハ
みゆるものから、はらのふえ、くだのふえハ、わみやうしやう
に、たゝかひのうつハものゝともにつらね、うちがね、おほが
ねハ、ほとけぐめきたるものなれバ、なほあかぬこゝちぞ。かみ
みうたのくだりに、いへるごとく、ふるきうたどもに、しらべ

あはせむには、わりさく、やまとぶえ、またハ、つゞみなどをこそもちつらねまねしきことなれ。しかのあれども、いまハさるわざつたへたるうたびとハありやなしや。おほかたに、からぶりのみ、つたへたるさまなれバ、しものつらぶみには、たゞうたびといくたりとのみしるせり

たびとかゞりびとをもちうるかむがへ

おほよそ、はふりまつりハ、よるをまちておこなふならひあること、かみにいへるがごとし。いまひるまにおこなふにも、たびかゞりなどもちうるは、よるをまなべるなりけり。かみのくだりにひけるふみどもに、みな、たびもてるかたあるハ、そのさまをうつしいだせるなるべし。かゞりびは、いはやどのくだりのふることよりおこれり

うちぎもてことをしらすることのかむがへ

うちぎハ、おほつゞみにかへあるなり。それ、がうけしだいに、よそひつゞみ、つらねつゞみ、すゝみつゞみ、ゆきつゞみなどいふこと、ところどころにみえて、つゞみうちてことをしら

せもれをなどのふるき、ふるきならひあり。かみまつりなどによそひするにも、ことにつくにも、おほつゞみうつあるは、もと、ことによれるなるべし。されバ、はふりわざにも、しかあるべきことなれども、おもきはふりには、さてもあるべけれど、かろきはふりには、たよりよからざるゆゑに、うちぎにかへたるあり。さてそれうちざまれごときハ、ことにあづかるひとの、ときのよろしきにしたがひてさだむべし

みぎりひだりハのりのもとなるかむがへ

みぎりひだりハ、あめつちめぐりにして、よろづのみのりのもとになむありける。このゆゑに、いざなぎ、いざなみふたはしらのかみ、くにうみなさむとして、くになかのみはしらをめぐりたまふときに、みぎりひだりのりをたがへたまひしによりて、ふさはしからぬみこをうみたまひ、あらためてさらに、ただしくめぐりたまひしより、おもほしごとく、おほやしまぐにをはじめ、もろもろのくにぐにしまじまをうみたまひき。されバ、やまとひめのみことのみをしへにも、ひ

だりのものをみぎりにうつさば、みぎりのものをひだりにうつさずして、ひだりはひだり、みぎりはみぎり、ひだりにかへりみぎりにめぐることも、よろづたがふことなくして、おほかみにつかへまつれるのりたまひき。これ、まつりわざに、みぎりひだりをただしくして、つかへまつることのはじめなり。つつしまではあるべからず。かかれば、いまはふりまつりつかふるにも、みぎりひだりのりをたがへで、つかへざらむかぎりは、みたまをなごめなぐさむることをえざるべし。そもそも、いまさだむるのりに、ふたくさあり。そは、まつりどころにつけるみぎりひだりや、まつりびとにつけるみぎりひだりやなり。まつりびとにつけるみぎりひだりは、それみにつけるみぎりひだりにて、いはゆるみぎりのて、ひだりのて、みぎりへむく、ひだりへむくたぐひにて、つねにことなることなし。まつりどころにつけるみぎりひだりは、みたまどころ、あるは、ひつぎにつけていへるなり。されば、そのひだりは、それにむかひてのみぎり、そのみぎりは、また、それにむかひ

ひてのひだり(左)のて、いはゆる(所謂)、みぎり(右)のみや(扉)、ひだり(左)のみや(扉)、ひ
だりはみくら(御座)、みぎり(右)はみくら(御座)なぞはごとし(如)。これ(是)、まつり(祭)わ
ざ(儀)につけて(就)のり(法)やする、みぎり(左)ひだり(右)なりけり。かみ(上)にいへ(言)
る、みぎり(右)はくらゐ(座)につく(著)、ひだり(左)はくらゐ(座)につく(著)、また、みき(酒)、
みけ(饌)なぞ、ひだり(左)にそなふ(供)、みぎり(右)にそなふ(供)、また、ひだりはしり(後)
ぞり(取)、みぎり(右)はしぞり(後取)なぞいへ(言)るものみな(皆)これ(是)なり。よく(能)こ(之)
れをしり(知)て、あやまつ(失)ことなかれ(勿)
みけ(饌)をて(手)つぎ(次)てそなふる(供)ことぞのかむづく

かうけしだい(江家次第)は、おほにへまつり(大嘗會)くだり(條)に、やひめ(八姫)ならび(並)に、
たかはしうぢら(高橋氏等)、かみのみけごも(神食薦)をさゝげ(捧)、しのゝいふ(云)、さきひ(最姫)
め、かみのみけごも(神食薦)を、ちひさだゝみ(短帖)のみぎり(右)はうへ(上)にさゝ(捧)
ぐ。つぎ(次)に、しぞり(後取)ひめ(姫)、みけごも(御食薦)を、さきひめ(最姫)につたふ(傳)。さきひ(最姫)
めやり(取)て、おなじ(同)たゝみ(疊)のうへ(上)にしく(鋪)。ひめら(姫等)、みけ(御食)をてもて(手)
つたへ(傳)て、みけごも(御食薦)はうへ(上)におく(置)。つぎ(次)に、みさこ(御肴)のな、なましき(鮮)
もの、ひたるもの(干)、あはせ(合)て、みけ(御飯)のひだり(左)におく(置)。つぎ(次)に、この(菓)
み(子)をみさこ(御肴)のみはみぎり(右)におく〔こは(此)みけ(御飯)のみぎ(右)りにてはなきか〕みけよりし(御飯以下)

○はふりはのやしもつまき ○

もならびに、くばりて、こたかつきにおく。また、みあつものどもを、そのつきにすゑて、おなじこものうへにたつ。たかはしうぢらつらなりゐたりのひめうけて、てもてつたへそなふ。また、みあつものふたしな、しざりひめ、みなみのやにつらなり。つたへやりて、さきひめにさづく。さきひめならびに、あつものつきをうへにおく。しかじか（こゝに、すめらみこと、みづから、みけをもりたまふのりあり。ことながければもらしつ）みけをはりて、ひめらつたへて、いやはてのそなへものよりはじめてさぐ。はじめのみぎりのごとし。また、ないしどころのみかぐらのくだりに、おほかしはでのつかさ、うちしきかむみけどもをあはせて、をみなづかさにつたふ。をみなづかさ、はしりわらはにさづく。はしりわらは、ないしのぜうにさづく。ないしのぜう、おものびや、ないしのすけにさづく。ないしのすけ、かみのみまへにそなふ。とみえたり。このほか、かみまつりのくだりくだりにしるせるさま、おほかたかくのごとし（こゝに「つたへ」「さづく」「てもて」つたふなどあるは、みな、てつぎてそなふるなり。さてまた、こゝに、さきひめといへるは、もじはつきごとによりて、かりになづけたるなり。のちなる）

たかむがふべし　こゝ、すめらみことみづからそなへたまふみけをゝみなづかさたちに、たすけまつらせたまへるものにて、ことぞ、てつぎて、みけをそなふることはもとなりけり。さて、ことにならひて、くにぐにところどころ、かむやしろまつりにも、みけをてつぐわざはあるなり。はふりまつりも、かみまつりにことならざることゆゑ、かみにいへるごとくなれバ、いまもそれにしたがふことゝしるべし

はかどころのかむがへ

はか、やまとぶみ、あめよろづとよひのすめらみことは、はかづくりののりをさだめたまふところに、みこたちより、かみつかたのはかは、そのうちのながさ、こゝのさか、ひろさいつさか、そのほかのめぐりは、たてよこ、こゝのひろ、たかさいつひろ、えだちのよぼろちびと、なぬかにをへしめよ。しかじか、かみつまへつぎみのはかは、そのうちのながさ、ひろさ、またたかさは、みなかみにならへ。そのほかのめぐりは、なゝひろ、たかさみひろ、えだちのよぼろいほびと、いつか

ふをへしめよ。このころ、しもつまへぎみはかハ、そのう
ちのながさ、ひろさ、また、たかさ、みな、かみにならへ。それより
のめぐりハ、たてよこいつひろ、たかさふたひろなからなるべし。え
だちのともがらふたもゝあまりいそたり、みかのうちにをへしめ
よ。このころ、おほみたからみまかりしとき、つちにをさめむ
このころ、ひとひもとゞむることなかれ。ありしがみえて、いと
おごそかなることあり。みよゝにいさゝかことなり
あるさまなれども、おほかたハ、かくのごとくなるべし。いかに

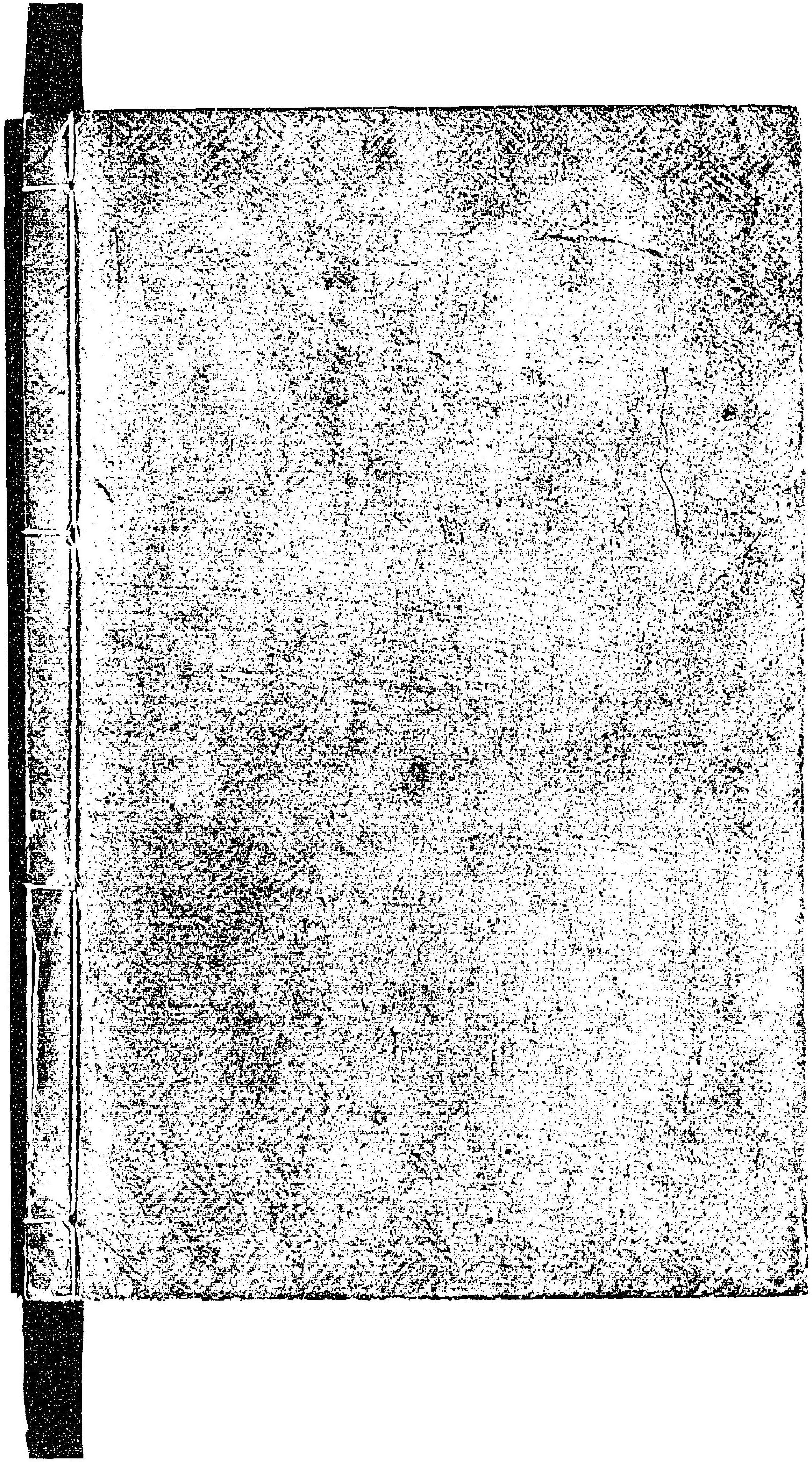
づきにも、をかにつきて、つちをかきならし、ひらつぎをするも、
つちをあつく、たかく、こやまのごとくもりあげて、つかに
きづき、そのねにみぞをほりめぐらしたるもあれども、みえた
りごとき、ふるくのつかさびとの、はかづくりのさまなり。
たゞびとハ、たゞ、つちにをさむるのみありて、そのつくり
ざまハしらねど、かみにならひて、そのほどほどにつかの
ふきづきしなるべし。かくきづきたらむにも、おのづから
みつけなく、たもちかたかるべし。いまも、そのあら

まほしきことなり。よしや、さのせにして、これつねのごと
く、はふりうづめたりとも、すでに、はかをきづきたらむに
は、そのさかひをたゞしくたて、よもに、まがきをむすびも
めぐらし、まおもてに、かどをひらき、とびらをつけ、そのうち
の、おくつきのまへに、いしぶみをたて、そのまへに、みぎり
ひだりに、やゝひらきて、さかきをうゑ、ともしかごをた
て、そのまへに、とりゐをたつべし。そのあひだに、つねに、し
にびとのこのみしくさきをうゑ、また、そのおくつきの
くえさらむがために、おくつきのうへに、ときはぎをうゑ
おくべきなり
いしぶみ　やまとふみのつぎぶみ、やまとねこたかのみづき
よたらしひめのすめらみことの、やうらうのいつとせ、かむ
なづきのところに、さきのすめらみこと、みことのりたま
はく。しのふゝ、やまにつきて、かまをつくり、うばらをかり
て、にはをひらきて、はふりところとせよ。また、そのところに
は、みな、とこはのきをうゑ、すなはち、きざみもじのいしぶ

みをたてよとみえたるぞ、いしぶみのことのものにみえたるはじめなるべき。そのいしぶみのかきざまハ、さうさうりやうに、およそはかハみな、いしぶみをたて、それのつかさかばねなのはかとしるせとみえ、またそのしふげに、もし、つかさにあるものゝごときハ、それのつかさくらゐかばねなまへぎみのはかとしるし、つかさをやめたるものハ、それのくらゐ、かばねなまへぎみのはかとのみしるせとみえたり。いまも、いしのおもてに、それにしたがひてしるすべし。さて、そのいしぶみのかたちハいろ〳〵にありけむ。いま、いせのくに、やまむろやまの、もとをりのおきなのはかじるしハ、いたいしにて、かしらハつるぎがたにすこしとがれり。これ、おきなのよにありしときに、さだめおかれしものとおぼゆるに、しかあるハ、かならずよりどころありてなるべし。かれ、そのかたちに、したがふをよしとす。また、むさしのくに、こまのこほり、ひらさはむらに、しやうわのふたとせに、なにびとのたてたる、おほきなるいし

ぶみあり。またそのわたり、いるまのこほりに、ふるきいし
ぶみふたところにたてり。みな、いたいしにて、かしらハつ
るぎがたあり、そのほか、こゝかしこよりほりいでたるも、
おほかたおなじかたちなり。おもひあはすべし
みぎのをぢ〳〵ハ、はふりわざにつきて、こゝろえおかでは
えあらぬことどもを、とりつみてしるせり。このことにあづ
からむわざにともがらハ、これらのことどもを、こゝろのそ
こにしたゝめおきて、ことにつきて、あやまたざらむことを、むね
とすべし

はふりのりのしもつまき をはり



下

東京圖書館
類 屬 函 架 号 冊
9
-36